

Achaemenid History Workshop

——ハカーマニシュ朝ペルシア帝国再検討の試み——

川 瀬 豊 子

ハカーマニシュ朝(アカイメネス朝)ペルシア帝国(前550-330)は、第3代ダーラヤワウ1世(ダレイオス1世、在位前522-486)の下で西はエーゲ海東部・エジプトから東はインダス河流域に至る広大なオリエント世界を統一するのに成功し、その支配下に言語、宗教、社会生活や経済生活を異にする多数の民族を包含した、歴史上初めての「世界帝国」を実現する。

ハカーマニシュ朝ペルシア帝国に関する研究は、帝国による征服の危機をかりうじて回避した同時代のギリシア人によって始められて以来、ヨーロッパではきわめて古い歴史をもつ。しかしようやく19世紀半ば楔形文字の解読が進むようになるまでは、「オリエントの専制国家」に対する「自由の勝利」の意義を説明することを主要な目的に作成されたギリシア人の著作が、我々が手にすることのできるほとんど唯一の同時代史料であった。その結果ギリシア人がとりあつかわなかった問題は欠落したまま、ハカーマニシュ朝のイメージは固定され、ハカーマニシュ朝を「自由のギリシア」のアンチ・テーゼとして捉える見解が、従来長くハカーマニシュ朝史研究を支配してきたのである。

しかし今世紀に入り西アジア各地でも欧米の調査隊による発掘が相次いでおこなわれるようになり、ハカーマニシュ朝史研究のための史料は、考古学的史料のみならず文字史料も、飛躍的に増大することになった。このような状況の中で、近年の歴史研究における「ヨーロッパ中心主義」に対する反省の潮流ともあいまって、ハカーマニシュ朝をペルシア人およびその支配下で生きていたオリエント諸民族の側から再検討し、あらためてその歴史と実像を問い直す必要性が強く主張されるようになった。

ただしハカーマニシュ朝に即して帝国全体を再検討しようとする、この試みを実現するのは容易なことではない。たとえば史料に関しては、文字史料・考古学史料ともに、依然として絶対数は不足している。加えて利用しうる史料が地域的・時代的に偏在しているという問題もある。一方それにとりくむ研究者についても、その数はいまだ必ずしも

充分ではない。しかも文字史料は古代ペルシア語、エラム語、バビロニア語、アラム語、ギリシア語、エジプトのヒエログリフ等、多言語に及ぶ。また考古学史料も巨大な王宮址から質素な庶民の居住址、あるいは洗練された貴金属細工からつましやかな土器片まで多岐にわたる。要するに今日学問の諸分野において専門化の著しいこの分野においても、帝国の全体像再構築のための作業は、一研究者の努力によって達成しうる類のものではないのである。さらに典型的な多民族国家である上に、歴代の諸王が諸民族固有の伝統を認める「寛容政策」を基本方針としていたため、限られた情報から検証されたある地域のある時期についての事例を、帝国全体に一般化しうるのか、あるいは一時的な局地現象として把握すべきかについても判断は必ずしも容易ではない。

このような問題に的確に対処するためにも、各研究者が自らの専門分野のケース・スタディを充実させるとともに、相互にその成果を学際的な共同討議の場でクロス・チェックを重ねることによって、より精緻なものに高めていくという協同作業が、他の研究領域にもまして、重要となる。さもなければハカーマニシュ朝を説明するのにギリシア語史料から得られた情報だけで足りるとしてきた、これまでの史料操作上の一面性から抜けでることはできないであろう。

このような現状をふまえ、既存史料の再検討および新史料の正しい理解と位置づけのために、組織され活動が続けてきたのが、オランダのフローニンゲン大学古典学研究所の Heleen W. A. M. Sancisi-Weerdenburg 教授を中心とする Achaemenid History Workshop である。

このワークショップは1981年フローニンゲン大学の基金を得て、同大学古代史研究グループのプロジェクト「イラン史と古典史料」の一環をなすものとして発足した。

1981年5月・11月の第1・2回ワークショップはオランダ人研究者を中心としていたが、早くも1983年5月の第3回ワークショップからはイギリス、フランス、ドイツ、アメリカなど国外からの参加者も増え、ハカーマニシュ朝史研究者の国際的な学際研究の場として重要性を高めることになった。以後1年に1回のペースで、ハカーマニシュ朝再検討のためのきわめて刺激的なテーマを設定したワークショップが、定期的で開催されることになる。ギリシア史家も含め、イラン学、アッシリア学、エジプト学、旧約聖書学、考古学など専門分野の異なる研究者間の意見交換を重視するこのワークショップでは、発表論文はあらかじめ参加者に郵送配布され、当日は発表者が論旨をごく簡単に報告した後、ただちに討論に入るという方法が当初より採用されている。

1984年にはロンドン大学古代史学科との提携が成立、以後上記フローニンゲン大学 Sancisi-Weerdenburg 教授とロンドン大学 Amélie Kuhrt 教授、2人の女性研究者がワークショップの実質的な運営責任者となる。翌1985年の第5回ワークショップはロンドンで開催。1986-1989年は再びフローニンゲン。そして第10回目にあたる本年1990年は、Sancisi-Weerdenburg 教授が前年度からミシガン大学の客員教授として赴任されていたこともあり、初めてアメリカで開催されることになった。

第3-9回ワークショップは、Sancisi-Weerdenburg, Kuhrt の他、P. Calmeyer (Berlin), J. Wiesehöfer (Meppen, 後 Kiel), P. Briant (Toulouse), Cl. Herrenschildt (Paris), Chr. Tuplin (Liverpool), M. W. Stolper (Chicago)等を主要参加者に、テーマに関連する分野の専門家を加え、約20-30名で構成されてきた。討議を重視する運営方針からすれば適度な、比較的小規模な集りであった(第10回については後述)。

なお1983年度以降のワークショップの成果は、フローニンゲン大学、the Dutch Scientific Research Council, the British Academy 等から補助金を得て、Achaemenid History というシリーズで Netherlands Institute for the Near East から刊行されている。

以下第1-10回ワークショップのテーマと主宰者側が提起した問題点について簡単に紹介した後、私が直接参加する機会を得た第9・10回について少し詳しくその内容について報告したい。

第1・2回(1981年)

Cyrus the Great and the Beginning of the Persian Empire

帝国の創始者クル(キュロス)の被征服民族対策を中心とする、帝国草創期の再検討。

第3回(1983年)

The Last Century of the Achaemenid Empire : Decadance?

活力に満ちた帝国前半期のイメージとは対蹠的に「デカダンス・衰退」という常套句によって説明されてきた帝国後半期の再考察。従来の見解が歴史的に妥当性をもつものであるならば、帝国が以後100年以上にわたって存続した事実は、いかに説明すればよいのか。

第4回(1984年)

New Approaches to Greek Historiography of the Fifth and Fourth Century and the Relevance thereof for Persian History in the Achaemenid Period

今なおハカーマニシュ朝史研究の不可欠の史料とみなされているギリシア人の著作の

史料的价值を、しばしば研究成果の発表の場が異なるハカーマニシュ朝史家およびギリシア史・文学研究者双方の参加によって再検討する。

第5回(1985年)

Method and Theory in Achaemenid History

「正確な方法をとまなわない理論でも興味深い結果を提供することはありうる……しかし理論のともなわない方法は中味の入っていないスープ鉢でしかない」(言語学者 Cl. Herrenschmidt 1976)。「すべてを、つまり過去のあるできごとに関するすべてのデータを集めることができれば、それが何故・どのようにしておこったかを我々はおのずと知ることができるであろう」(歴史学者 R. N. Frye 1974)。このように明らかに異なる見解が、ハカーマニシュ朝史研究者の間にも存在する。しかし我々にとって必要なのは、あらたな史料の収集はいうまでもないが、それ以上に史料に応じた研究方法、そして何より研究における鋭い分析力であろう。

第6回(1986年)

Archaeological and Written Documents from the Various Regions and their Relevance for an Analysis of the Functioning of the Central Achaemenid State

帝国支配の下で地方的・民族的な伝統にどのような変化がおこったのかを考察し、ハカーマニシュ朝の「中央集権体制」を再検討する。

第7回(1987年)

The Roots of the European Tradition

ハカーマニシュ朝ペルシア帝国が、前5・4世紀以来のヨーロッパの文学、歴史叙述の中で、あるいは19・20世紀の研究文献の中で、どのようにあつかわれ説明されてきたかを分析、ヨーロッパ人の中でのハカーマニシュ朝に関する伝統的イメージ、イデオロギー的バイアス、文化的偏見等を探る。すなわちポリス民主政を実現した同時代のギリシア世界から啓蒙思想、近代ナショナリズム、あるいはアーリア人の賞揚に多大の精力を費したナチズムに至るヨーロッパ世界において、古代イランのイメージは果してどのように変化し、あるいは変化しなかったのか。

第8回(1988年)

Asia Minor and Egypt: Old Cultures in a New Empire

ある程度文字史料にも恵まれ、かつ征服時にすでにかなり異なる社会的・文化的伝統をもつに至っていた小アジアとエジプトを主要な対象として、ハカーマニシュ朝の支配が、統治下の諸地域でどの程度貫徹していたかを討議する。

第9回(1989年)

Ancient Iran through Travellers' Eyes : European Travellers on the Antiquities of Achaemenid Persia

同時代のギリシア人の記録,あるいはサファヴィー朝期以来急増するヨーロッパ人旅行者のハカーマニシュ朝期の遺物についての報告は,失われた過去を知る上で,貴重な情報を提供する。ただし旅行者は応々にして,彼らの目に普通ではないと映ったものを強調するものである。しかも彼らは新しく得られた知識を,自らの文化的あるいは知的枠組の中で納得のいくように,解釈しようとする傾向がある。このような旅行者の報告から,ハカーマニシュ朝理解のために,どのような有効な情報をひきださうのか。

第10回(1990年)

Continuity and Change

通常200年に及ぶハカーマニシュ朝ペルシア帝国のオリエント支配の時期は,「ハカーマニシュ朝期」というタームで示される。そして伝統的にこの時期は,輝かしい古代メソポタミア文明の終焉期として,もしくは衰退しつつあった伝統文化がギリシア文化との接触によりあらたな発展をとげる「ヘレニズム」時代に先行するものと,みなされてきた。しかしこのような安易な時期区分は,歴史的現象には様々なずれが存在することを示すことになりかねない。たとえば政治・経済構造と文化,中心と周縁,支配民族と被支配民族など。

さて私が初めて参加する機会を得た1989年第9回ワークショップは,フローニンゲン大学創立375年記念事業の一つとして4月7日から5月20日まで同大学図書館で開催中のPersepolis in wisselend perspectief展をしめくくる形で,5月19・20両日“Through Travellers' Eyes”をテーマにおこなわれた。出席者約20名。上記ベルセポリス展は主に17-19世紀にイランを訪れたヨーロッパ人の著作,一部ベルセポリスからの出土品,を展示。さらにそれらの内容紹介を兼ねた報告書,H. Sancisi-Weerdenburg (ed.), Persepolis en Pasargadae in wisselend perspectief が——英語版の刊行を期待したい,きわめて興味深い図版を多数収録——同大学から出版された。

ワークショップでの発表者とその論題は以下のとおりである。

5月19日

H. Sancisi-Weerdenburg (Groningen), “Through Travellers’ Eyes : the Persian Monuments as seen by European visitors”

J. Balcer(Ohio), “Erich Friedrich Schmidt”

J. W. Drijvers (Groningen), “Cornelis Bruijn and Gysbert Cuper. A Skilled Artist and a Learned Discussion”

G. Steiner (Marburg), “Die Zeitgenössische Würdigung der Entzifferungsarbeit von Georg Friedrich Grotefend”

Chr. Tuplin (Liverpool), “Classical Travellers in the Achaemenid Empire”

M. Brosius (Oxford), “Some Notes on Economy and Trade in Persia as Observed in the 17th and 18th Cent. Literature”

*Sancisi-Weerdenburg によるペルセポリス展の内容紹介(スライド), その後展示見学。

5月20日(午前のみ)

P. Calmeyer (Berlin), “Achaemeniden und Persepolis bei J. G. Herder”

H. Sancisi-Weerdenburg, “Nowruz in Persepolis”

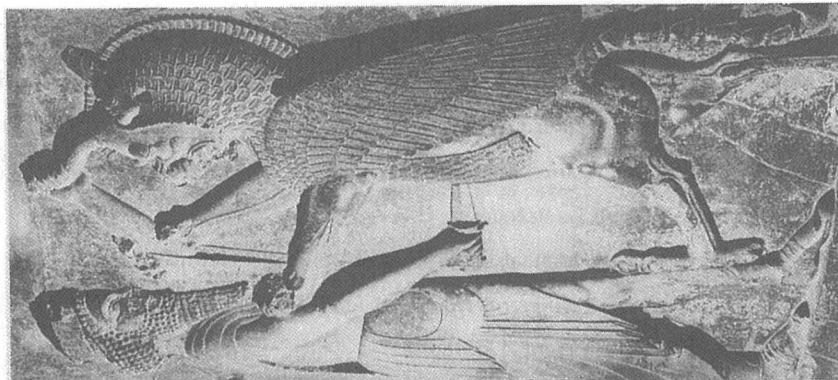
J. Wisenhöfer (Meppen), “Engelbert Kaemfer in Naqš-i Rostam und Persepolis”

M. Vickers (Oxford), “The Views of Persepolis by William Marshall and Wenceslaus Hollar in Sir Thomas Herbert’s Travels”

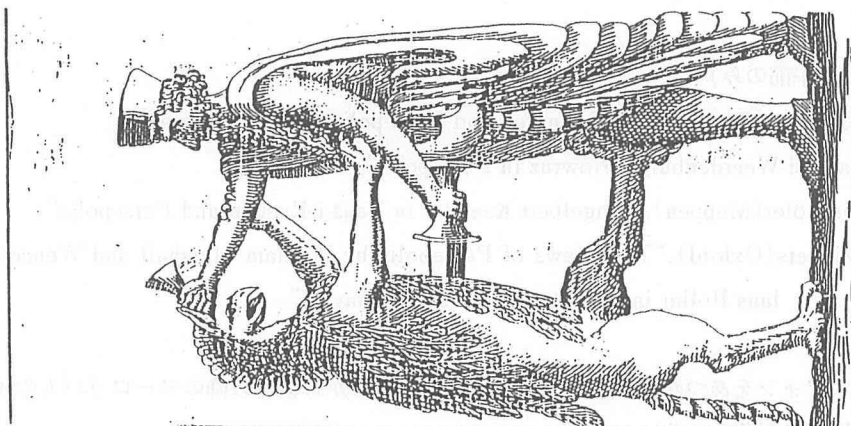
クセノフォンをあつかった Tuplin 以外は、ほとんどが17世紀以降のヨーロッパ人のイラン見聞録を対象とする。

寡聞にして近世初期以降のヨーロッパ人の旅行記に関して十分な知識をもちあわせていなかった私自身にとって特に興味深かったのは、Sancisi-Weerdenburg の第2発表であった。彼女は、1954年 R. Ghirshman および A. V. Pope が提示して以来論議をひきおこした、ペルセポリスが帝国の新年祭挙行の場として建設されたという見解が、何ら目新しいものではなく、すでに18世紀初め以来ペルセポリスを訪れアパダーナを前にしたヨーロッパ人旅行者によって——Cyropaedia など過去のギリシア語文献から得た知識のゆえに、あるいは同時代の新年祭を実見したがゆえに——繰り返し主張されてきた経緯を明らかにする。

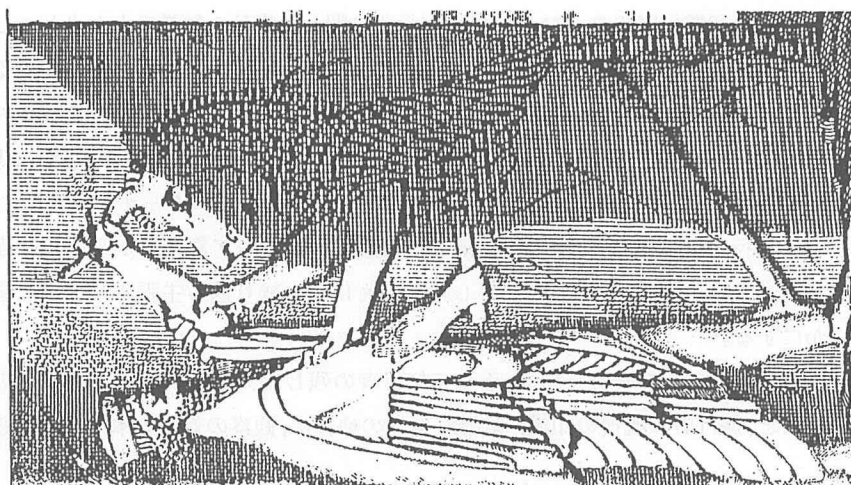
Sancisi-Weerdenburg の報告を聞き、そして旅行者の残したスケッチの具体例を目のあたりに見ると、旅行者は既得の知識、価値観、偏見のゆえに、観察の対象の本来の姿を必



写真版



Chardin (1735)



De Bruijn (1711)

——ペルセポリスのレリーフ「獅子と戦う王」——

H.Sancisi-Weerdenburg (ed.), Persepolis en Pasargadae in wisselend perspectief, Groningen / Leiden 1989より

ずしも素直に見るのではないということを、あらためて思い知らされた。むしろ彼自身が見たい、あるいは見るはずだと思い込んでいたものを見る。とりわけ J. Chardin のスケッチほど(図1)、「ギリシア人/ヨーロッパ人の造りだした幻影」からの解放の必要性を主張する、当ワークショップの危惧を鮮明に図像化したものはないであろう。

ただし旅行者の報告が、自らにとって特異と思える事物、現象に多くの頁を割きすぎるのは事実だとしても、それらが場合によっては現地の人々があまりにも当然のこととして記録に残さない/残さなかったものを、結果として補筆することになるのもまた一面の事実であろう。

このような旅行者の報告を「史料」として有効適切に利用するためには、研究者が旅行者自身、あるいは彼が生まれ育った社会の伝統・価値観等に対しても十分に洞察を深めると同時に、慎重の上にも慎重を期するアプローチが何よりも肝要であろう。

残念ながら最終回となった第10回ワークショップは、4月5-8日アメリカのミシガン大学で開催された。最終回にふさわしく、“Continuity and Change”という総括的なテーマが設定された。多数の研究者を擁するアメリカでの開催ということもあったのであろうが、古代オリエント史上におけるハカーマニシュ朝ペルシア帝国の意義を問い直すことにもなるこのテーマに应运、実に60余名が一同に会する、熱気に満ちた大盛会となった。ミシガン大学からの多額の補助金のみならず、National Endowment for the Humanities からの助成金が認められたことも、今回の大会合を可能にした重要な要因であったに相違ない。

さらに注目すべきは、National Endowment for the Humanities の助成金の一部が若手の研究者育成のための基金(Junior Scholar Stipends)に充てられたことであろう。現在ハカーマニシュ朝諸分野の専門家は、世界各地に散在している。この基金は、そのような現状をふまえ、若手の研究者にも国際的な学際研究の場で最新の研究成果に接し、またシニアの研究者とも広く出会う機会を与えるという趣旨の下に設けられた、と主宰者側は説明している。希望者は、履歴書と現在の研究課題、研究の進行状況、成果についての報告書、および指導教官あるいはそれに相当する人物の推薦状を提出し、ミシガン大学の選考委員会の審査を受ける。対象は15名、1人200ドルが支給される。

私は Junior という表現にこだわりはあったものの、Sancisi-Weerdenburg 教授からの勧めもあり応募。幸いにも京都大学人文科学研究所の前川和也教授のきわめて好意的な推薦状のおかげで、助成金を認められる好運を得た。受給を得た15名のうち、イギリス留

学中のドイツ人女性、カナダ人女性各1名と私以外は、すべてアメリカ在住。1人200ドルという支給額自体からも(旅費は基本的に自己負担)、この基金がアメリカ在住の若手研究者を主要な対象としているのは明白である。しかし受給者には会費40ドル——晩餐会・会期中の昼食費用等を含む——が免除される上、私の場合は、同じく助成金の対象に選ばれたカナダ人女性との同室を条件に、Sancisi-Weerdenburg 教授が手ごろなホテルを手配して下さったこともあり、計5日間のアン・アーバー滞在費はこの200ドルで十二分に賄うことができた。

私と同様に参加費を補助してもらった人達の多くは、果敢に「大家」と称される年長の研究者とも接触をはかり情報の収集に努めていたのであるから、ワークショップおよび今回それを支援した National Endowment for the Humanities の趣旨は充分に達成されたと言ってよいであろう。いつの日か日本で世界のハカーマニシュ朝史研究者が集う会をもとうという提案は昨年来いくどかなされたが、その時果してこのような援助が期待できるのであろうか。

今回はワークショップに先立ち、4月5日“Empire Builders: A Colloquium on the Architectural Expression of Imperial Power in Ancient Persia and Greek”と題するシンポジウムが、一般公開の形で開催された。まず D. Metzler (Münster) と M. C. Root (Ann Arbor) の2人がスライドを用い、建築・美術史的観点から、ペルセポリスとパルテノン神殿を比較。その後 Briant, R. Descat (Bordeaux), S. Humphereys (Ann Arbor), Kuhrt, P. Michalowski (Ann Arbor) がパネラーとして加わり、ペルシア帝国とギリシア世界双方における王宮/神殿造営のための財源、労働力調達等の問題にも及び、約2時間半にわたる活発な意見交換がおこなわれた。ただし専門分野以外の一般聴衆をも対象としているせいか、私自身としては、それほど目新しい成果を得るものではないように思えた。

以後のワークショップの活動は次のとおりである。

4月5日夜

Sancisi-Weerdenburg 教授の自宅で歓迎ワイン・パーティ。

希望者が午後8時半頃から三々五々集まるというスタイルであったが、結果的にはワークショップ参加者のほとんどが訪れたようで、まもなく会場となった2室は——台所にまで人があふれ——立錫の余地もないと言ってもオーバーではない状態となった。私はこの席で初参加のソヴィエトの高名な歴史家 M. A. Dandamayev 教授 (Leningrad) や現在「城砦文書」の未公開テキストの出版準備事業に携わっているシカ

ゴ大学の Stolper 教授など多くの著名な研究者に紹介していただき、初めて親しく話を伺う機会を得た。私のようにこれまで欧米の学界と疎遠であった人間にとっては、このようなアト・ホームな集りの場であらかじめ紹介の機会を得られたことは、その後のワークショップでの接触をよりスムーズにおこなう上で、非常に有益であった。4月6-8日の日程は以下のとおりである。

4月6日

参加者登録

- H. Wright(Ann Arbor), "Integrated Studies of the Development of Empires"
M. C. Root(Ann Arbor), "Lifting the veil : Approaches to the Study of Artistic Transmission beyond the Boundaries of Historical Periodization"
Cl. Herrenschmidt(Paris), "Écriture, parole royale et monnaie en Iran ancien"
G. Windfuhr(Ann Arbor), "Saith Darius. Dialectic, Numbers, Time and Space at Behistun(DB, Old Persian Version)"
J. Balcer(Ohio), "Ancient Epic Conventions in the Bistun Text"

総合討論

昼食

- P. Calmeyer(Berlin), "Babylonische und assyrische Elemente in der achaimenidische Kunst"
U. Calmeyer-Seidl (Berlin) , "Achaimenidische Entlehnungen aus urartäischen Kultur"
Ch. G. Starr(Ann Arbor), "Reflections on the Greek Sources for Persian History"
Chr. Tuplin(Liverpool), "Persians as Medes"
O. Muscarella(New York), "On Medes and Median Art"
H. Sancisi-Weerdenburg(Ann Arbor), "The Orality of Herodotus' Medikos Logos"

総合討論

晚餐会

4月7日

- E. Carter(Los Angeles),“Bridging the Gap between the Elamites and the Persians in the Southeastern Khuzistan”
- R. Boucharlat(Lyon),“Continuité a Suse au I^{er} millénaire B. C.”
- M. A. Dandamayev (Leningrad) , “Achaemenid Mesopotamia : Traditions and Innovations”
- M. W. Stolper(Chicago) , “On Some Formal Resemblances between Achaemenid and Hellenistic Babylonian Legal Texts”
- P. Machinist(Ann Arbor),“The First Coins of Judah and Samaria : Numismatic and History in Achaimenid and Early Hellenistic Periods”

総合討論

昼食

- J. F. Salles(Lyon),“Du blé, de l’huile et de vin...”
- D. F. Graf(Miami),“The Persian Royal Road System”
- R. Descat(Bordeaux),“Tribut perse et agora greque : continuité et interaction”
- D. Mitten(Cambridge Ma.),“Lydia in the Achaemenian Period”
- J. H. Johnson(Chicago),“The Persians and Continuity of Egyptian Culture”
- S. Burstein(Los Angeles),“Alexander in Egypt : Continuity or Change”

総合討論

ミシガン大学 Kelsey Museum で開催中の“Crowning Glories—Persian Kingship and Power of Creative Continuity”展を見学。同博物館ホールで簡単なワイン・パーティ。

4月8日

- J. Zahle(Copenhagen),“Oriental Religious Cults and Opposition to Seleucid Rule. A Numismatic Commentary”
- P. Briant(Toulouse),“Institutions macédoniennes et institutions perses”
- A. Kuhrt(London),“The Transition from the Achaemenid to the Seleucid Rule in Babylonia : Revolution or Evolution”
- A. Invernizzi(Torino),“Pre-Hellenistic Motifs on the Sealings from Seleucia-on-

the-Tigris”

J. Wiesehöfer (Kiel), “Beobachtungen zum Nachleben von Achaimeniden und Alexander in Iran”

D. Metzler (Münster), “The Achaemenid’s Place in Roman Imperial Ideology”

総合討論

各報告には30分が割りあてられ、報告者が5分間要旨説明をおこなった後、すぐ質疑応答に入る。時間は大旨厳守された。午前・午後のセッションともに最後に30分間の総合討論の時間が設定され、さらに昼食やティ・ブレイク等の時間を利用しての意見交換も活発におこなわれてはいたものの、発言希望者の何人かがとり残されるということもしばしばであった。報告者の数を制限し、各報告に1時間程度を充てた方が、議論をよりほり下げることができたのではないかと思う。また場合によっては、あまり意味がないように思える発言、あるいはあまりに感情的に聞える反論による時間のロスが生じたのも、いささか残念であった。

今回は参加者および報告の半数近くが考古学、美術史関係で占められ、一方文献学に基づく報告の多くは依然としてギリシア語史料に依拠するものであった。

その中であってギリシア語史料の再検討を目指している Sancisi-Weerdenburg は、ヘロドトスやクテシアスの伝えるメディア王国年代記が、バビロニアの年代記やペルシア人の口承から情報を得たギリシア人によって改編された、基本的にギリシア的価値観に基づく産物であることを論じ、史料として信憑性に疑問を投じた。

私自身は、彼女の論証過程にはいくつかの不満や反論も残るが、結論自体は受け入れることができる。しかし彼女の報告は、R. N. Frye (Cambridge Ma.) をはじめとする激しい反論をひきおこす結果となった。討議の場以外でも、彼女の報告に対する否定的な発言を、私はしばしば耳にした。長年にわたりハカーマニシュ朝史研究を支配してきたギリシア語史料からの情報を洗い直し、再解釈を加えようとする試みは——ワークショップの主要なテーマの一つである——、困難な骨の折れる作業であると同時に、心理的抵抗があるのか、いまだ必ずしもすべての研究者の共通の了解点になっているわけではないということを再認識することになった。

ギリシア語史料の中に、オリエント側の史料に基づく実証的研究を補う貴重な情報を与えるものが存在することは、誰も否定しない。しかしハカーマニシュ朝史研究の隘路を切り開くためにいま何よりも必要とされるのは、安易にギリシア語史料に頼ることを

避け、まず具体的かつ精緻なオリエント側のケース・スタディを充実させ、それに基づく議論を展開することであろう。Stolper が自らの報告に対する Frye との質疑応答の中で、「私はバビロニアの行政文書、裁判記録の中で確認できる事実を通して議論する」と毅然と答えたように。

そのような観点からみて、今回のワークショップの中でとりわけ興味深かったのは、Carter, Dandamayev, Stolper の報告であった。

Carter は自らが参加した発掘調査の成果に依拠して、フージスターンとファールスを結ぶ伝統的な交通の要衝ラム・ホルムーズ平原——スーサ南東150km, アフワーズ東50km——およびその南東に位置するベフベハーン地区が、前1000年紀前イラン系諸民族と低地エラムあるいはメソポタミアの都市的伝統との接触・相互交流の場として重要な役割を果たした可能性を明示する。

Dandamayev は主に新バビロニア期・ハカーマニシュ朝期, Stolper はハカーマニシュ朝期・セレウコス朝期の、かなり長期に及ぶバビロニア語史料を分析の対象とする。両者の見解は必ずしも一致するわけではないが、ともに文献史料に基づく報告の中では、最も精緻な、かつ示唆に富むものであった。

Dandamayev は、ハカーマニシュ朝の主要な関心は、徴税・兵力動員のシステムを確立することにあり、自らの生活慣習、文化、宗教をバビロニアの人々に強制するものではなかったことを強調する。確かに神殿財産に対する国家による管理の強化はあったが、それは、XPh [クシャヤールシャン(クセルクセス)ペルセポリス碑文 h] に基づいて一部の研究者が主張しているような個人の信仰に対する介入・強制ではない。正統・異端という概念は多神教の社会ではまだ知られておらず、むしろ信仰の自由こそが古代社会の特徴であると指摘。

一方 Stolper は、ハカーマニシュ朝期からアレクサンドロス・セレウコス朝期の約束手形、売買契約文書の様式・タームの詳細な検討により、従来セレウコス朝期の新しい変化として説明されてきたものの多くが——たとえば利子率の規定、取引税・登記料の徴収など私的な経済活動に対する国家の介入強化——、すでにハカーマニシュ朝治下に始まっていたことを明らかにする。一般に政治的・制度的な変化が文書やモノに顕著にあらわれるようになるまでには、しばしば時間的なずれが存在する。確かに個人的な、しかも地方的な性質の強い、契約証書に新しい条項が付加・明記されるようになるのは、Stolper が言うように、国家が課する条件が十分に効力をもつようになって以降、あるいはその条項を明記しなかったがゆえの訴訟が頻発するようになって以降のこととみるべ

きであろう。ハカーマニシュ朝期の当該文書の様式上のバラツキは、あらたな状況に対する適合のプロセスがまさに進行中であったことを如実に示している。Dandamayev がむしろハカーマニシュ朝の「寛容政策」を強調するのに対して、Stolper はハカーマニシュ朝後期に対バビロニア政策が強化されたことを重視する。

“Continuity and Change”というテーマの下で開催された今回のワークショップの報告の多くは、Dandamayev や Stolper のようにハカーマニシュ朝期における変化に言及したものもあったが、大旨先行する時代、あるいは続くアレクサンドロス・セレウコス朝期との連続性を強調する。

長い歴史をもつオリエント世界の新参者、しかも全体からみれば数の上で劣るペルシア人あるいはマケドニア人の支配の下で、被征服地でおこりうる変化とは、根本的に国家主権の移行およびそれに伴う若干の統治行政機構の変化以上のものではありえないのかもしれない。加えて「ヘレニズム」時代の繁栄が、オリエント世界の「衰退」「停滞」のさなか、突如もたらされたかのように説明されてきた過去の研究のあり方に対する最近の反省を考えれば、連続性の強調は、ハカーマニシュ朝史再検討という立場からは、むしろ妥当な方向であることは認める。また一般的に実質的な変化を立証するためには、かなり長期に及ぶ、しかも量的な変化の証拠を提示しなければならないのであるから、利用する史料の絶対数が不足している当該分野では、とりわけ困難な作業であるということも充分に理解できる。

しかしあまりに連続性を強調する報告が続くと、200余年に及ぶハカーマニシュ朝ペルシア帝国の支配とは一体何だったのか、何が変り、何が変らなかったのか双方を俎上にあげ論じなければ、全体像を問い直すことにならないのでは、と落ち着かなくなってくる。各地域の個別研究の蓄積がまず優先されねばならない現段階では、性急に結論を求めることは避けるべきであろうが。ただできればもう少しバランスのとれた形で“Continuity and Change”各々を対象とする報告・討議がおこなわれた方が、最終回を飾ることになったワークショップとしては、より実り多いものになったのではと思えるのである。

それにつけても最後に残る最大の問題は、本来ハカーマニシュ朝史研究の主要な担い手となるべきイラン人自身が不在であったことであろう。

しかし10年に及ぶ Achaemenid History Workshop の活動が、研究史上にあらたな進展をもたらしたことは確実である。ここで提起された様々な問題は、今後個々の研究者により、あるいは他の学際的な研究の場で、さらに継承・論議されていくことになるはず

である。

私自身としては、とりわけ Dandamayev 教授、Stolper 教授から多くの貴重な情報やコメントを与えていただき、さらには今後の研究上の助力を約束していただいたことは、望外の大きな喜びであった。また私と同様城砦文書を主要な研究対象としている、オックスフォード大学在学中の意欲的な女性研究者 Maria Brosius と知遇の機会を得たことも大きな収穫であった。

最後に、このような世界のハカーマニシュ朝史研究者が集い、情報交換がおこなわれる刺激的な場に、太平洋のはるかかなたの日本からも参加する機会を与えて下さった Sancisi-Weerdenburg 教授と Kuhrt 教授の御配慮と御好意に心からの謝意を表わしたい。

(1990年7月7日脱稿)